

途上国の子どもの認知発達 (1)

ケニアと日本の6歳児の人物画比較
西方 毅
(目白大学作業療法学科)

1) 目的

情報機器の出現と社会の文明化の進展により、現代社会の子どもたちは、50年前（情報化の発展以前）の子どもたちと、生活形態、行動様式などが大きく変わっている。その子どもたちの心理がどのように変化したか、50年前の子どもたちと類似した生活を送っている途上国の子どもたちとの比較を通じて明らかにする。今回は、その内、Kenya の子ども調査の一部を報告する。

2) 手続き

Kenya の国語、スワヒリ語を話せる日本人と Kenya の正規学校教員の協力により、個別の子どもに面接し Goodenough の DAM を実施。日本人の同世代の子どもの描画と比べて、認知発達上の相違を検討する。

Goodenough の DAM を用いた理由は、非言語性検査であり、「人物」を「描く」という、文化的影響を受けにくい検査であることによる。なお、DAM の解釈は、小林(1977)のものをを用いた。

3) 調査対象

Kenya 共和国の Tanzania 共和国との国境にある Namanga 町(人口2万5千人)の日本人経営の保育所に在籍する 6 歳から 8 歳の子ども(平均 CA 6:10) 男児 11 人、女児 9 人である。なお、年齢については、Kenya では曖昧な場合が多い。そこで、年齢の推定はその子どもの生まれた年のイベント、季節などを親から聞き取りを利用した。

4) 調査対象の特性

Namanga は農牧業を主とする町であり、子どもたちの生活は貧しい。電気の来っていない家も多く、生活の大半は野外である。いくつかの保育園がありほとんどの子どもが通っている。しかし、Kenya の保育園は日本の保育園のように「遊び」はまったく行わず、算数、英語などを主とした学習を行う。また、自分の家でも親の手伝いや近隣の子どもたちとの野外遊びが生活のほとんどを占めている。このような事情により、「紙に描画する経験」は極めて乏しい。ただし、保育園で普段から学習時に経験しているため、鉛筆を用いること、文字や図形を描くことには困難はない。

5) 結果と考察

・MA の分析

男子の DAM の得点分布は 6 点(MA 3:10)から 18 点(MA 6:8)、平均は 10.8 点(MA 4:11)であった。

また、女子の得点分布は 3 点(MA 3:1)から 15 点(MA 5:11)、平均は 9.7 点(MA 4:10)であった。

以上の結果から、単純にケニアの子どもの認知発達が日本の子どもの発達よりも遅れているという結論を出すことはできない。この検査の標準化はケニアの子どもとは異なる描画体験をもつ日本の子どもの資料に基づいていること、ケニアの子どもの資料数が少ないことなどの限界があるからである。

とはいえ、ケニアの子どもたちに何らかの認知発達の遅れが見られる可能性はある。情報化も進んでおらず、テレビ・書籍なども少ないために子どもの認知発達（図形の認知）に必要な環境が十分ではないと考えられるからである。この点はさらなる資料の収集により検討してみたい。

・ケニアの子どもの描画の特性

Table 1 は、今回の描画の特徴をまとめたものである。「頭」、「目」、「胴」と言った外形についてはどの子どもも書いているが、細部、特に「まゆ」、「頭髪」、「胴長」などで描画率の差が大きい。資料数が少ないために検定はしていないが、より多くの資料で裏付けられるとすれば、この点はその原因を検討する必要があると思われる。

頭	目	胴	脚	口	まゆ
100%	100%	100%	100%	100%	91.7%
100%	100%	90.0%	100%	75.0%	15.0%
		6:0		4:6	3:9

衣服	腕	頭髪	胴長	鼻	腕脚
88.9%	972%	100%	94.4%	97.2%	97.2%
45.0%	60.0%	35.0%	20.0%	50.0%	50.0%
5:0	4:0	3:9	3:9	3:9	4:6

Table 1 DAM の採点基準 (小林 1977 より抜粋)
(上段：日本の6歳9ヶ月児の描画率、中段：本調査被験児描画率、下段：被験児平均 MA)

参考文献

小林重雄 1977 「グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック」三京房
西方 毅 2006 「ケニア、都市部と農村部の子どもの日常生活」目白大学人文学研究紀要